

世界インターアクト週間によせて これからのインターアクトクラブ

インターアクト委員会
委員長 奥田 吾朗 (大阪RC)



今年の地区のインターアクトクラブ行事も残すところ年次大会のみとなりました。8月に行われたマレーシアの海外研修も「日本を知る。アジアを知る。世界を知る。」という目標のもと5日間の研修を無事終えることが出来ました。これもひとえにサポートいただいた岡部Gをはじめ、各RCおよび地区の皆様のおかげと感謝しております。

島国で育つ我々にとって、異文化を知る機会を出来るだけ多くの子どもたちに与えることは、とても大事であり、インターアクトクラブ(以降IAC)要覧にある「IACは、社会奉仕と国際奉仕の2本柱の活動を通して、リーダーの育成や国際人としての様々な力を身につけることを目的とする」に合致しています。

しかし、一方で地区IACの存続が危機に直面していると警鐘を鳴らさざるを得ません。直面する課題は、大きく2つあります。

学校の抱える問題とRCの抱える問題の2つが起因となって、運営が困難になりつつあります。IACは、学校が主体の活動です。そのため学校が魅力を感じる中身であれば、RCの活動として、これまでどおり主軸のひとつとして存在できます。しかし、予算のカットなどが続き、ある限度を超えてしまうと各学校からやめたいという声が出てくる恐れは十分にあります。現在、私立学校との提携がすべてですが、私学の経営状況悪化も今後、重要なポイントとなってくるでしょう。

地区のIACを存続させることを決めるのであれば、最低限の校数および予算を決めておく必要があります。また、法人に対するCSRが厳しくなる中で、活動の中身を再確認するその時期がきています。

会員数の減少と予算の減少は、取り組むべき課題ですが、抗いようのない事実です。しかし、一方で、予算一律カットという安易な予算組み立ては、組織存続の臨界点を越えてしまうことにつながります。今年度は、岡部Gのご理解のもと、ご支援いただきました。しかし、学校が主体のIACは、どの委員会よりも最初に問題が顕在化することは間違いありません。地区、RC、そして各会員がIACの活動をしっかりと考えなければならない時期が来たのではないのでしょうか。これからも皆様のご理解とご協力を心から祈念いたします。